古今
奇談

蒙句冊

弐

へ遠13
2·017
2

へ 19
2017
2

古今奇談莠句冊第二卷

㊂ 求家俗説ハ異同家ハ神霊同答の話

摂津国ハ菟原とも菟苓とも唱るなり。昔より求家として三ッあり。ハ男ハ男ハ名なり。住吉村なる求茅渟づゝ鬼ばゝともよびて男とよ。鬼ハ男ハ

がゝるゝや。東明村なる八ッ目女家とゝ味泥村なる女家ハ菟原男と

そ。そ家ハ状茶の方長く出るゝを俗ゝ車ばゝと唱ゝ。馬鼠封ハなぶれた

るゞ輾ハ家あゝ八なゝん。家の置るゝ多東ハ住吉ハ西面し。西の味泥ハ

東面して中なる東明ハ家ゝ左右ゝ撰ぐゞ分し。三家ハ同おゝ各ゝと

しく十数町一家ハ周廻住ゝ各八十間ハ上ゝ多ゝあゝ。上世の唐住乃

荒ゝるゝゝ今荒るゝといゝども未代ゝ名顕るゝくの訳あゝん。古来文人ハ

住吉ゝ撰て藻を供ゝ。葦ハ名のゝなひをとゝめ奥御と称しゝるゝ

事古ゝて物語ハ柄となるゝ。一ゝ也丹只の宇世伝某なゝるゝの古なる

関の戸系を連て高沙礼辺を遊賞し給るゞて。此れ中の陵を懇
懃に拝して。そゝ氏独言常に云々それ家淡公家の
地にして。そ氏族恩義の外ハ与ずず。然る霊社ハ別ふして日夜懇て
祢を祭り祭礼を修令れ日さへ怠ずず。是祢平人の家とゝろ中聖を
言に對して云。是如何なる者人の法ぞ。関云我も知ずず。云まゝずして
何ぞ人を祭る。云我ハ山男う拝るに依て降る家れ祢なり。そ始
ハ稀に山家を拝る人あるゞ為に降られて我任とゝろ。先つる遠の
海島より我を降してかゝることのそゝり。彼祝詞に云。そ奥御ハ饒速日
命。そ祢ハ子孫我海の伯として家我占法を伝を認て守といひ
住吉と名つけ。國社在す。茅渟の玉出に向ひて共に海の幸我ちりの。
常に遠く祈て海利を多う。今ハ動信しなんとして。そ地勢と
らず。家れ祢を清なりて。そ地の家我交て。山水似る地を撰んで御宮

を志す者なりと告る。是もまゝ知る礼故に求家とて類うと。人に
授て。そ向ふ人早ねとて。中聖を。毋に遠き不よう一つびも清
来ぞ。祈りて加護をゆるとやある。答云。凡そ祢道ハをきに直法あり。法
礼弘まる不なり。此格子礼外ふうそ信ハ類ゞ。内に伊の足なるとき
くして霊験あるとゝそいとゝ。もたゝとゝれ。今礼白幣ハ供拝して服装
る者ども。みわを忌田なるの供ゝて。帳降る時。祢の嘗のゝ御し給ハ
も彼う偏に定め供人是即ち祢の義る理うて。そ祢を安んじ給る
礼道なりとす。中世云祢霊祇さどんバ後ハ田に鄙まて平地に伝ら
ん。云ゝそれも昭穆のそ忌にうて八そ人ゝ。そ業田芝海の変
土地乃沿革ハ法をう恨ひ。そ家礼石に塩を房ふる礼いかゝ。へ俗
法る者ども家れ祢ハいで忌好ふ。ゝんおほぞ。ゝるりの八実罰もとひ
らすゝん。霊あうて降す人者に絶ずとも。祢ハ特ゝ各ふに降め

とかゝりて地に伏をゞ時うて笑ひ来り独言の無答をあん法うあひて。我をひとりや出くんと寄れるひ星よりうて人くもかゝりぬ

古さうに

たまゝひハをうきさゝもるかうろよろぼれ抱ハかゝるまであうろを

かゝること八声もなく香もなく。いよいよぬる彼ら心をとめんゞその身八酒色財気よりある事にて情も無もおろこゝ引をそひ初ゞさをむしし中の家ちらく富うるくいろなる古法も初ゝぬる。寄れをゞんして又せうる冊子よむゝ八の国に伝る人一人のちうるをあるゆひまるをのこ二人ゞもち志ゝのまさるまわりんとをくど。かゝちもよそひもなるんもきゝおとうなくおやなるの定めるゞて。生田川に流るる弓矢射あてうえまわくんと約をるゞふるうゝて八ゝをれひと尾をいうりれバ女をひまゞひて。名のゝ生田れ川よおちうねふうるも八ゝ不ゞ流く

一人八見ゆる一人八よ弦をくゝて伝ゞ孔うう。男れおやども来うて。女の家を申みゝて。だ右ゞ二男れ家を造うゝ始終八いつ乃世かうともさゞらあゝび。伊勢乃御のあゞ

かげとのゝれれトまてあひまをゞとゝなきかゝハらひなうゝう

け客人わすう乃行づきゝおほく昔ゝよゞ邊なゝと隣不者と大家ゞ流ゝうゝて

をゝとひやきれゝさくきるゝの酒むうれをとあふゝバぬう神

ゞ古きゝ伝とひる旅人ゞなる味泥の家ゞて田れ畔ゞとる人ゞ向へバ言ちくゝ我いわうへといさなひて。僧法さくゞ昔とあうぬ。け彩家なる庄友の女子ゞ女とハいまゞ人をゞんゞられ名。二七ゞゝずゝして国秀れきこえあう。父母秘蔵ゝして深閨ゝいづゞずといへども。音ゞ聞てゝふくも見ひそめて。け家ゞ婿となうんかの家れ嫗ゞ至へんとゝゞうきと。或ハ

家門お高らを人品お儀す。毎月往ろうて。氷れ上下より就合そろ人乃
種を接ハきゝくしたもとあるて。礼を敬え私と拵て筆又拵ゝ書う
よせ。思ひて彩るそれ人のめづらしれ人ハ又まを又ずまれ来ろそ拙
ろハしく。誉まず子佳人れ常ようをくて急ようもなさハもくせい
らみとるびしかんぷいまくろハ同狂うせいうとくなるべし。牽も挑
も毒紙と投せざるハ。一日よろいろひなんを。ひを守宇の故事又競
さを。いぶる狂魄とし。意といふ影同の表又ちる風乃。涼切又ひ
くすあるら雑なくめどを。浮ろ拙狂羽て究ろなる。設けて色想
歌又入って出て因狂明て又つ。公又向ひてもえバ一筋又ハわしいたを
男女のはるとるハ好まくうねとて。茅淳れ住吉なる男又女
を立ておくてび許人又あつて。発也を送ることをげくなる。宛も
信うづちよ夜さむを法。菊れ枯枝又法ろて住吉ようと。九くむをび

てひれ字ろて新したる狂ろけハ。むくさをうすえをかさねてつ
くる中ふ。月しをれうすえをかさひて。斜又石をぢ引る下絵
して。筆だてるハしく。身をもくてなぶるそれ時信ろハ独の涙
れ来の水ろをとるげしくうさ身なるもなどよひてそ。武世る
らでハいろれよふハとろへバよそ又ん。峯れもくを。今ハ家身をう
ぢむをぐれ。あそハ嬉ともけめぐさ狂ざえ信るぢ流をと保つ。磯の
藻くずもあそれとハ又ろらんかし。女も奥じてうけびくゝいでさけ
ま。ハ侍女あけおの心えて返し「紬れきろれの水ろさとなるてきハ新不
又ちと又ひしまくる雲の面ふろるよハあくすなんぢちのたぐあハ
拙ようそハまて計ろくそいそのりくすれるめまも浮ようの根るく。
あすハ行ろれ岸又傍ぐきも。不ろくて打をさくみたんかも」お
ぢぐんの下をそ狂あくハよ。又そそ立の松又つけくぽしきのろす

えうふよきうう。あハものうゝれるとぶたうとうふせのふのちれるらめ
ハぬをてうてきうゝあぴ平なうゝぬ爲激ハあすゝおぼつうなゝふゝば。
あハでれうゝのあとなうてもあうんとうて。ならくよきづくかひさ新
ミッセ川。滅の水尾もなくなばくねとさなぐ一年すうて。「兎女も文る
いどゝみようぐうされてぎあういくよとおまりせうれぱ。あけぼのあうう
爺をと厭ていうれ川とばうあうゝうゝ。かくて考位ゝえず。父母ユヤ
で遠うゝぶうぶうるうむうくてあ新うのへんと許ゝ文ふ。ぶるユはゝ
荒原ユ生田殺魚て目ぐる庄目信ぎ。那家ユ婚を求めあユ娶ら全を慰
懃をたくゝ告求む。滿きる不のあ場あうユ候うてぴすめにかくとなん
告る。兎女胸さうぐて。ゝつぐ宮ゝ茅渟ユ告新ゝせうれぱ。わゝハユハ兎弱
ぬうぐぐ。兎ユ壻ゝんと言ようゝる弱。再ひ起して家ユ娶んと使を
いくを。をむ。女方の切うる求ユ。父れ弱いづきへもあゝ沙ぐ。家業ぐ

きゝんユ許さあ。射藝弱競て立めんと日城約ゝ。生田れ川ユ之ゝ
張ゝて。女の男ゝきゝくユ裝束ゝうとう勸おひて。水ユもゆうもの
ぐきんとをむうひ。きゝをひて獲員を試ゝる。兎系れ男の射ゝれ深
明方ようを射通ゝて正殺の矢目も正ゝきユ。茅渟の男ハ目高
のうを射拔ゝて大ユ恥ゝ退ゝきぬ。かうゝれぱ。父の弱兎女を兎系
ユ許ゝぬ。女ハ家ユあうて。ぴ獲員ユ狗ふれ。茅渟れんゝて第ユ甚
能ふきぱ。兎をかちなんぴうるゝて公殺ゆう。目も合んまゝうユ競
つることハふうぬまけあきぱと。千ユ百ユ念ゝうびうるユ家れユ来う
てゝべうハ兎系殿ゝて獲のひぬとやユ胸にぎきふむ於なくうちなよ
れぱゝうせんとをひうぱゝうひ。ようゝく父ユ係てふゝび競ハせんとなん
てうあんとなさくもムユ射む。父ゆうてうばゝうユ作ゝれ若日ゝうち
らず告んとうふ。兎女宮て我家ユ入うゝ衣引ゝうづき係てゝぐぐめゝ。兎の

幸ハ学るべきなり。今やうの新しき人ハ、人の心巖の堅きことあるべ。
蒲葦ハ弱き物なれども縄と成て牛を繋ぎ、我と己れ我身を縛し、
罪を我おひて。蒐原よりむかへられ、鶴の舞ふ所なんと独ごちなき
て。夢覚と捜ぞんバ、雀の巣しらずせまくしう。母ある
りの子女の心ざしを思ふ。堪へ難ふ。いろ安きひあんやかこぞりてひ
そまうくるわらふ。天台ようとひせ一乗法師。言ハ君因性幼名にあ
池九とよび。乳力ハ寿長し。大石と成し。大木ハ拔き。時の元奥ま
遣ハ師匠の法師もおたくらきられバ。この流一法して逐ひ出やる。筑紫へ
還ってハ不ハ経歴。一富を求む。孔子ハ妻ハ有るとひれ分ハ
ぞハ。使ち離ひて乗入を。湯を引せ黠乞ハ者ハ。
怨敵除の行ふ。ふりと供養を。山伏内のやれちひとくるとえて。
いく月れ和ふ陶寂の人ありやと問ふ。母氏ってくらねて女が外れ

をうくる。傷ふ。茅渟の男幾ばくの世ハ有ある。未書ハ不ハ
女孤ハ一かくあ女をえくこと出くこう。上ぐきれあることぐしとおくくも
あう。萩の葉なくバとかきしもえ。性一親して足ばくくハ六美ふ甚
人乃自身ふハあじ。跳ふ人ハ庭ひくくも。足ハ人乃墨色と掛る
ふ。人もまめふるくくて。文の初も古きハ襲ひて肺府ふ出る
くもえくこと。求ふ不美色ふ非で美庭ふあう。俗情怪偉ハ
くくびと云。母氏ふて才幹あくん人をえくび。茅渟ふきくて人ぐを
霞ひ少せくるふくくにいひくくる茅渟男ふハあで。ふ氏れ侯人ふ
て。上牛明らなくで通ふ女郭ふ。人の有ふ婿くくんと
欲すぐでいまぐふ系ハ有るでとのあるまーなくふ。性少てきれバくそ
ハ立色ふあくす結ふあくくう。国秀れ遂ハくくもふのんくくバ。茅
渟の男ハ我ふまくせ分。本ハ氏れ恋しくてすてめとぞいひくる。かくて茅

浮れ男先に趋て奪ひとらんとするから燕を搦せ来りし人教を遁れて
こゝろせし。猶自一個ひそかに女は許にいたりしが障子の下にかくれて。さ
すがらはしくも内出ず。独ばかり出しけり。始より一同も見ぬとなれど。
使女はけがれのをかぶり隠れる紙障てかくしたる法術使にありて箸をも
て来りてたらくへ立らず。男云今日法舟を全くするぞ。八戸を家にとど
めんと畏す。法師大に発化て怒るさまあるバ。彼男をやあやまりけると。
家人ホ肝をひやせバ法師居へていそしむ。此ところ傍に守に法身梅ぐら
た一ツもあらずと。今より怨る海陸の言すくも許らんと紙男云それい
さらなひあるうすなり。燕ずに入り給で。逢きるにいとやすし。女云そ
是ハ逢ふ人の身にさぞなきかしらんざらとも二心なき誓の文を
今ここにて一紙かゝせ給へと。文かく四寶筆法をとり出し。把をとらせ又また
バ。彼男俄に赤面して二度は誓約ハせぬ物にてそと身を退きけり。

女云是厭事にはあらず。今ここで遁るゝとき多き所探くしりぬればおもひ
をはかりを強て乞うるに。是非なく筆に信て紙を染る所人をはなつ
る数多の遁ハし文にハ書き似もせず。詞をくでうず。かんなも濫なり
これバ果して最初れ人にもあらば。後に証を以く彼うに対し。使女を
代としてわざむきぬ。世にかんなる乃ちしてもぐさすりもの八枝痒くる
ることで人にえらい八。因果の縁とはなるべきれ。人のくるはかりまどひて
愛せさせたり。此家の難ハ是までなりけり。彼お八風流縁業今や殺
生にも及べりと独を捕ひてそをそんぬ。菟原男ハ女を茅渟にとりて
きぬと思て女すらはば。邪なれ親をまでうらみ。茅渟男が全くするを
遂ひいて御家の松原まて及ひつき仇をとらんる眼は別れて。逆眼やえ
からし。やがて刃傷におよびおわしてはしく斃ぬ。燕は井りに代らくる
使女は免きられども慈て文書るを自ら悔られば遂に住吉川に

投く沈めるは揚きわげく。三家は族おそろして。こ人の志えろく。今
ごきよりねば。使女を古さとれ東明に陸こ。蓬原男は味泥に埋ぶ。
清の男は信者の家に家せろ。家女は志を失ひ三死皆は乞ると繋
を切くくに過ず。山三家は拂ひちらして高ゝび。山石に家若に女女
家と。ものくは衣服右刀やなぐひまでこめて。家にも限りの竹も
ひてぐれば茅清男にせ来るはあってもかきて有ることなしと。倦ぞ
かろうて。そ庵し幻に失られば其家は霊あんとをや茅ぶれろに
ほのもくの木乃枝るびくろくらごちねをとるもとるべくしも
東は家は社びに近く住昔高に繋らきて底にようろる。行脚の旁
に来る人あり。服は祝めさこどか者くる結は日うげにあゝぬ縁地なれ
ば。山伏にやと名ちくるると見ば。今はかくとろくる業に害あり。元信
陽の道を釣る我永なり。遠トの道は手変はさと。修道及はを変

を移る。法師は遠は万物皆ることをふとくるる。あ物は元実用なる
を今ちり狂に伝りて。木金土の意城とるよ。まゐは教はものゐ指に
紀りて。太古地を分置すれ教となり。西鄙の別国は古へに政と五行に
分ちく司どめくる。此はたとくば宮基の土地に大八洲に及び浮
法は平地とる。国を開き頓丘畝丘城墨築猿の土功まで。土の友と大
なることと金は初流鋤鍬廣矛横刀鐘皮鐵廠を出とし。火は羽鞴
鍛煉草焚柴焼の業非常は災は出とし。時節の火を改は来る。木は
林伐木宮室楼臺高く太しき柱厚く厚き板を搖深梁を要とす。水
に属をる官土に並て大なり。百川は朝をる。海の幸塩の利可怜巨浪
乃呑舟大魚貝珠流むまでを。況瑞穂は出に。今は太古と依に志て
ゐりぐのかぐうそひとるに。清海原は先に素戔嗚の大任にて。其に清
る海伯の一家あり。そ先は祖そる西海に淡板して重を移る徒弁乃

末裔なる。浪速ゆ。こなたなる投てを今まく彩八を。水郷を生ん。海伯
の長なる。宮居殿殿の御館と称ず。を后宮位者姫貴美国雅なる。是
れ恩愛水と魚とのごとく。外ハ言葉進めて政を補ひ内ハ嬪御を率て
和を書ひ。ひとの除むの恵を厚くし。九ツの一ツをも網めるん。庶邑を温恵
を被らといへども。事拙れ中を持せざるや天道の照らさん。寛政流れて
一ツの民恵を常として。遠ふるの号失礼のもなりけるこ。ハ。ひの長
る菊猶の民あり。ほ志謀て云。西土の占トれ言ふ。大臣小臣を徳を見
るすと。是の者ハ恵の偏みして止るなく。民の者ハ支へて恵のるる
なるざるを勉む。今中道を彩ひ仁恵ハ永くせんとするの。後宮の柔
仁の相合ハ。ハ二枝合鞘の遠風一方を背さざる。民ハ微忠伸る
ことあるハず。今れ計ハ卿を窮を情て移るはを乱て高制を濫んハい
らの中ふ小竹多の民ハ伶俐をのとうて。上国の下まるし時狭邪の情

を彩くれバ。今ハそを用て君の顔眄をうん。母の軽盈妬嫉ハ君の
左右の充て色授け同許りの之ゥ。ゆを選を品外の入れて同秀類媚
て容俏を偽と称るの。苑舎の民の家の摩脚摩て乳育るを女
あり。足紙調書を雲鬟束ね。淡粧粧抹涼国れ態格を去り。
吹弾歌舞琴瑟人を楽しめ。脇物の妍ハ巧を装の起し。待羅の
艶ハ茶の秋を拠る。粥く書ひ歩て発彩るの及んで。を美を拠れ屑
とせず。拭けバ平四川四れ曙ども礼を美ハず。雅表味噌を情の為
ず。やがて盛の民同の彩ひを。びん人ハねるもなきつかうつぎ云つ
ぎてを名宮中の達を。海伯を一びんとをれども。位階
ゆて。みぬめれ浦ハ山の名のして。恵しを紙で貝の之けん九下の羨
まをつ。海民の年くの狩彩ハ浪速の潔除ハ七術の一ツなを。ハ。を
の吟えて海漁そのあさ噪を。例の俳伎を日苑舎の安を飾りて。劇

枠を拔くるを見てやうに。山浦人乃弱き等ゞ笛鼓突拍子合せ中。御
稲春女姫突突部為妹子之為真妹弟代万載とゝやしてゆく。思
微弱して一つびゝんの人。我眼を独り絶屏と思う。今山なこて遠く
勝れる。乙織女の雲我離れて傍らと見めひて。宮り還て見を石
る出ぐも。雲女も家と悔りて来ず。頻りよるまゞ我ごひ情
殿へ上ぐさあよ〳〵といなこて。初てさあれ頻りて〳〵来
らざをハ。礼を犯し公道をとるとて。思の恵り濡れバ下司
を我押て誓殿よいる。思身ら除んで見めよ。我偽せ偽の姿
よハ似めず勝りて。そこぐよ高初の送を出よ約束なりて眠
れ日なりとやてさに起ぐ色なり。思無憐て仮を乎れ国法罪を
走ぐ次今日のこと出てこんとゝ殺されんとゝ。女云世よ玉珍
雲して八を者の生んと我欲し。見を恐てい手死んことを欲す。生

ちと殺ちと八思のるよありて見いぶ初ぐ不とこて。思いやす
よ神為け。学よ女八ありくうと。手伝よ宮内よ留めんとゝ石れど。
宮府の親揚よ邪ぞ。且彼をゆしてそ為よ送りくし。手衣暗
よ水宮よ石されて。海戸よ掃を加へひ。一連三日山よりもめよ。
見より大よ家光を以て日よ祝ふ御宮ふわこせ御座て方の
法師ふ供ひ来て。思の親近を辱くし。群臣役り我ひて。逐よ改
を一日し。日の弥れ義徳を〳〵ぬ濃ぐく均等乃令命を及ぼしる
よ。さこて石れ名よ遣てこともゆこて。思の乙八一日よりゆ法くなるよ
乙隆ま。御宮よ内館を侵して待ひゆくぬど。鰐背ぶ脛の徒よ倦
るぞ初なれバ。蒐令ひとう女よて妻八女よあくずやふど。逐よ及
同よ及ぬ。思もさすぐ水宮よ躭留る我保て。蜻蛉の水よ点
ぐる程よ乞きなく。家雲偏よ蒐妻よ近む。中黄丈事八外よ不出と

いへども。姫の威容陳努れば其夜寝ねて。内宮の御うを探り出て君恩
はなてえぐるを初。后宮より参りて詫をもくむ。是例おきこゝろあ
らば。妃は有よ君公を恨ゝ怨言をする時ハ却て城の為よ損もるなり。
ゝ名りても君公内よ入りゝ也給へ。顔を和らげ菟舎を召て左右よ
侍せしめ。妃ハ身早て席をもうけずして。君のもてなすまゝ
数日れ後てゝはろうをもんと云。姫温柔ふゝて能く言を用ひ。
菟舎を撫てをく侍しめ。御同して君よなずうるひられ姫の容
を又て。そゝて美妙の空色姫うとゝ也中よ驚ゝさ憂ゝ。君の仙大よ
暢て勢うきひ拍めすまで。姫と菟舎と席を侍て眠す。是ようえ
締まも内よ入りゝ也ぬ。姫ハ遂て退きて去ようよ菟舎ゝ好哭
きを数ゝ。一月の後陳努れ侍ふて手ゝ也ゝを吟て大よ悦び。
又言を迎めて妃今ようあ祇飾らぞ。艶服を去て。素面軍服し。元

れ侍婢と雑うて君よ伏侍しゝ。姫を泣ひ去入ゝ。姫ハ服して
使役を少ようかふ。君ゝて姫の自ら卑きうを嫌ゝ。菟舎をして
用しく使役侍けしむ。姫を菟舎を更ずひゝ子ゝ菟舎を抱て左右よを
めるれたり。一月れ後陳努の侍ふて云。時市曲水の御遊ちし。
き日よいろうて妃高衣を去ゝ。新よ裁るゝ〳〵を服して粧ひ脂澤
を施し。ゝ也ゝ顧をトしゝ也と啓す。姫ゝ言よいろうて新衣清潔脂
粉芳澤を凝して陳努よいろる内氏嬉女をゝ侍く。妃を我粧者よ座請
て。繞花投て姫の面上乃濃淡を示し。ゝ子て右れ子よ丹粉浸ゝを眼
澤頬の涙よ施し。匂ひ座して侍ふ安をうんあげうんゝ〳〵長袖の制すよ
宵けりと。線を好ゝ去ゝ辺を寛くし。事已て席をトりた右て云。妃
遊て元をうんバよく奥よようて寝よつけ。君来るともん差と結して
ふるゝとなるゝ。そゝびまゝバ一夜ハこれを迎ゝ。君狎て殿るもらんと

すこも答ぐめくして射めんと泳くさとをろ。姫ぞうて君よ礼す。君眼を
凝して顧眄こと異なり。姫ハ皇帝同れ侍して倦ぐめくして宮よ陽る。
時うつず君内よ来りて侍て行ゝんと笑ゝめ。姫色沈附してんす。
宮婢をして国こ繞しめ君を慰めてやる。次の日また内よ来る姫を
不辞して迎へ。ぬる君入てそ急りを責ゝ西。姫云あこよ独眠
よ耽て幽栖常とある。君のた右ハ美女仕へ奉りて無之しうゝ次
とそよよたゝて。礼を失ふよ言葉ふしと罪沈断うめよ。そ夜君内
よ入て坐して出ず。姫出て歌待侍よ鄭面を開かる。君相狎るよ及ん
で。新見系を調戯ぐめ。君出んとして云。爭ちば入て鎖ん。姫仰て
君沈熟視て云。妾久曠をうて且色爲らとそ。狂ら苦ら宝ゝ
ぞ。ひそかや内宮久しく掛ハぞ。君頻よ辱さハ妾起て酒爵をとり
殿ぎよめして後日ゝそハと強す。君三日を過ると年を越るぐごへ

らせぬひて。歌鄭後宮よ動く。ぬれ日法勞の嬪女まうて出ゝ紙史
て鄭ゝて卜。姫ハ天仙の美貌近つふを壓べし。何ぞ美令女よ下ん。
歌らくハ媚道よ深し。老人の説よ従ゝといへども。君ゝ悩ゝを求
ゝよハぬふわゝと。二人粧閨よ入りて。姫よ近くて目を強て人を
視ぜしめて云。背撃よるてゝ。微く笑ハしめて云。靨頬美よあれど
好しさもなきハ右よるゝむしたよぬゝずと。秋の波ゝ澄めの見
黛の靡の微くて流ゝまでそ巧を悉し。そ仏妹爭ハ自ら
人和ゝとト。姫ぞ義よ走ゝ。そゝぶび紅を多な淡を塗して自ら拭ゝ
ゝひなを嘆ゝれゝよ御徴して。悲を主ゝるれん苦よまさうけ
ぎバ君大よ姫のを乳と抱ひ。朝美爭歌居よ起よ離をず。姫ハを泣
美云女よ涙く親しゝ。射高よハ必す並び坐して君の帝をゝんとす。
君ゝよ和て美云女をゝんゝよ。魂さと笑おのづゝ仏ゝ。冠章日

と裏一呂婢女の群と祝ふのこと。小竹多れば疫よく千様を忘て内宮ふ人あり〻〻と。蒐舎女と含めて漸〻よみを抱して君の〻〻人を遠ざゝり。却て外宮と居て歌よう後て侍御を辞退せ〜むまどと。姫を留めて千年緑を落さず。かくて海伯の主千歳れ後伯古姫と蒐舎女と常と使ひかゝる。今ハ昔くぶひと舟れ〻ある勢氣を沸るをこの百熊ハ。画よかける縁よりやいべ〜と。姫ちよ新元と後して。体勢後田肉と外ふふと成功あるを蒐て。千家と厚く勧ひ。君の家れ来ぬと二陽れ家を賞ま〜もると。妄恵の爰がゝりあるとど。三家若と男なるそゝり。たれど馬鬼封ある抱ハさゝりの位なゝん。或ハそ家の大ゝる八上巳れ後制詳家なゝざゝれ。ゝ。ゝ美と媚の人を送ハすを

右とゝひたといひてひ人の選ひと校をるたなゝバ道古を典侍冷子れ嫉ありきとゝるものゝ〜

まゝ おとゝなゝてゝたゝてゝん老ようおゝひゝゝぶれひハゝゝもも酒ハ飲ざゝを八碎べゝゝ次借ゝの紀ゝも内ようゝるふわゝず。色ハ假ゝ也ゝ人と時と宝めがゝゝ孟子抱ゝゝれ色とハわゝじ。財と位と爰ゝ忘ゝゝ欲もゝて。ゝゝゝもゝんとゝゝも皆財ゝ乱ゝそわゝてゝいゝゝゝを抱なゝ飢てゝゝゝハず死ゝても恨ゝず。強ゝを引ゝゝ取ゝ堪ゝも耐ゝゝゝ。人の立なるハ内とあゝて。詢れゝ徑れひゝゝゝゝゝを抱ハ此の馬鬼封とんゝゝゝも氣ゝゝゝ

四 玉林道人雑話 回頭を反する話

生土を去て因縁れ地と移ゝハ。仕宦藝林商賈ゝゝ沒て雲傷の樹下石上に宝めざゝ。氣概人と北方て悪ゝ術受て麻ハす。侍儀ゝゝ紀と却て竟ゝ人と殊勝ゝゝ。又発起なゝて八一ゝび困ゝゝハ主むゝゝ憂厥くなゝ。喬木と攀侍荊棘を撥まぬ抜絶むも。ゝ居さゝぬ縄張狭

くして。剃髪して大事をとゝのへずハ若くべしと云る大法ハひぬ
太守よりて一ときよハゝじ。こゝて人を容ぬよう者を通るを法号ハ失
記ゝ。時の人回臥和尚とゝゝ。常よ人ゝ射して回臥と云ける。人或れ
て跡ゝよ婆婆訶とあゞ名す。実もよく塵情ハ離さゝん。仏号礼参
の業もゝんとゝ清早ゝ宝を掛ひ懸を罪さて。回ゝる山乃爵蒼を拭
れ井ゝゝ幸ゝ。深夜ゝ扶と側て一昂の沸勃を吹て独ゝの況
とす。宜ゝゝ飲の禁ゝ止る之ゝゝ易ゝとすゝハなく。京の陝
きさゝん。たゝとゝるゝ速なゝ。ハゝん。少捕持春細川氏友仇丸音問たえ
す。是ゝて武林道人として文学兼て記臆ゝく。梵香瓶花宴禅茶理ゝ
俊りて。優長なゝ。忙しかりし世ゝも捨ず。後ゝ大禄師ゝ為して大
氏を受恢ゝゝる人ゝゝ。回臥の性急なゝを取つきゝゝてゝく對
左をもれども。ゝゝめてゝゝまぬ性受ゝて。常ゝ放言ゝゝく京の癖

ゝ做ひ宜ゝよゝれバ井四の偽ゝゝゝ。煙ハ尺ゝゝ極ゝくゝ。
ゝび。銭舟ハ高の多ゝして。別ゝバ自在をゝゝゝ。不動の人ゝ
ハ者人ゝゝゝ。心銭用ゝハ拘的を執と用ゝの深ゝあゝ。ゝ抑て
尺ゝゝゝ。家師ゝゝ人ハ茶七を不可往と頭して。是程まで
ゝ回ハ逆すゝ。是ゝ往ゝゝ。京の心柔柔を幸ゝと治せゝれ。
府廣く平ゝてゝゝ。ゝゝ亦往ゝゝ。二ゝゝも楞伽ゝ極
ゝれ。ハ厭ハくゝて。常ゝ長緒結ゝゝゝ。ゝゝ三ゝ
銭さゝん一ゝゝゝる人ゝハ者ゝを焚て。ゝを。ゝ。ゝ床ゝ蛍の光ゝ
を借ゝて。小窓浮ゝと。ゝ楽ゝ。浮世一日の閑をゝて。ハ逢ゝゝして閑談
す。是ハゝゝく。晴窓疲眼銀ゝ問ゝす。自ゝ與ゝするゝ。人の與ゝゝゝ
陰ゝて人ゝ者ゝゝの心ゝと。ゝ師をさゝん容ねハ玉林ゝ人ゝ性急を是
ひて。ゝゝ心ゝあゝ。但静動浄識ハ與ゝゝて厭ハず。軍中ゝ百服十

服の禁古く記す。世の俗情ハ微なるものゝ小幼より敬を知る人のもとより知ざる。一分の見ハ必ず脱ぐ背よ多くん。和尚も回訳あんと已に回訳あんと言くらる。時に回訳自身ハ真像を自画しるに賛をもとふ。玉林即ち書を

敲打或猥事。稱有化魅魅。自作自己解。狐画不動戯

そゝろ言をそゝとして。回訳一吟して脱を抱へ席上に滾び痛笑て。笠人の邪なさ奇なるる。謗らるゝとて伝ゝ。俗に混ぜれば俗伝もすゝし。素人に接ハ自己ハ図字解法て侍も書ろ。天狗に佛像を出しむるも。表人せぬハ待ぬ俗もあり。此変てを卓の多ゝ多ゝ。此潤字に八変澤ふ卜いきさせ汁の飯を進めんと云。を席上に百人半訳に一歩を進むとて。玉林ハ頭乾ゝと待ず。回訳著す

竿頭濫觴浄妙坊。殿回擬寶牛弱殿豈啻有皮内有餡莫作放下一様看

光を投ぐ人もあり。人を撮るるハ行をゆぐさも自己をかゝれず。殊勝ハ大法新して。真ぬの波ハ起ぬ日もなゝと唱へて。ハ足を留めず。脱て。あゞ名ゝ人なるやを出ゝふと唱へあり。霊山の秋迦ハ茶に契りてゝとゝバ面を背く。君来ずハ何やへもの上とかゝのに利益あり。実を傾城を知ゝぬハを情さん笑来なゝ。さるふても妓女を抱て怪たゝ。ゝる僧英もあゝゝと。一幅の歩を練る遊女。玉林の書を求む。お稲呂ち一対十二字城添らる

有智丟温柔卿。多情挨孤老関

回訳云。温柔卿ハ趙飛燕ハ故事。温柔の卿なゝぞや。孤老ハ顧郎なるべし。岐女ゝ遊婿をさゝてゝ云ふ。丟と挨とハ愚ハ知ゝず。云温

柔郷弘めて郷の字をも用ゆ。僅徒ハ人の多く用ふる所を主となすて正
す人なり。孤老ハ元姻嫪なる者なれきて孤老の字好く適へバ。多く
用ふる義を奪ふ。ゆえ鈍ハ一去りてきて〳〵くぐれ多なり。換ハ
狭きなはさまれるなり。回改黙して。又一聯を発句して対を待つ。

俗中なる人なり愚ハ知らず。ゆえ仏なる是山人
耳欲攀高。他力村学認假山人

玉林対して

心要掘藏。自賢財主買假古董

山人と隠士名を假る君なり。好画を賛つけて賞翫を妨るは
假山人なるべし。老人ハ一室に光あり。拙ハ人ハ対ハ鑿拙の出なる
るなり。一日回改逍遥して少補の鍬を携る。近辺引て書斎に待つ。書
童伏侍して茶果を進む。ゆえ斎中名人の書画改写皆古雅なる書横

二百許累ね積む。已に主人出て侍を交ふ。回改旁を見めぐらし云。大家
は多蔵なるかなし。但書籍多れ人に見ぬ拙ていゆえ補を穴なる
を知言れめし。掛幅ハ東坡乃書。語ハ西風昨夜過園林吹落黄
花満地金。その菊は白なるべし。いで白を先を讓る。回改

けさうれバ垣根よりなびける芳初濃なるの風に散やそめたる
腰や弱ぬらうとゑ。ゆえ補ゆえ云る調明白なる。但已ハ野窟なり

菊のうちに咲て拙く秋ハあまど山風ハ色よちる花ハ哀し

回改云。菊ハ散ぬ拙。秋菊の落英を餐ちとハ楚辞なり。園史
に花雑結密なるバ落ざる。技蹟なるハ風に遇ハ散て地に落
とまるに。花ハ枝ちぬめ根さんかきめやとよまれ。散ぬ花ぬ
をを秀をとでけの人。少補答て。楚辞ハ落英ハ花に拙ハ

を。菊は葉ハ食ふべきものゆゑ。ちゝ先ちゝぞ去めべき。偽よ逆へ
訪るれ、とぞ。亜よ敷ゝるとよまず。但し用ゐと高ゝと花の初終
あり。菊よハ直よ敷といゝぬゞ安ゝるべし。此二句ハ揚州の菊花こそ
敷て地ゝ高ゝる。王荊公ゞ作と。欧陽ゞ知ゝで弱ぜし。知ゝてし強
ぜゝゝ。已よ来説あり。元ハ上人の性識たゞ。回況孫解てげゝ
たゝと云。少補曰よ案じて。此列ゝ書摘の内。作ゝなるゝ。
一冊とゑて用ゝ不の行二三字備しゝ。ぬ已晴よ来句と足す
べし。回況笑ゐゞ書童よ命じて。故意と隅ある塵を積ゝる之
屑のゝゝ不ゝ。ゝ客よ答顔を掩て言ハしむ。書童一不を元
て云。そゞめなゝゝる。少補云。此上文ハ。酒なゝんとゝひゝれば。回況
云。源平の記の五節ゝ勝撃ゝ。即ち阪よ。伊勢平氏ハすゞ用ありとゝや
されゝ。少補云。伊勢国司の記よ忠盛ハ平氏ゝて此国ゝ人ゝ。

度の神よ一千度案詣して。酒ゝん歌よ一ツの童と飛びてゝゝ。
ゝて。酒ゝん人とゝひゝれば。瓶なゝゝ。それゝ用を姓ひつまバ。
ふ故障ゝよ。ゝ。とゝん。されど孫の世よ亡びゝゝとぞ。そゝゝ西の例
し用出ゝゝぶきよ孤を用ひずとゝれゝ。回況今一試せんと云ひ。
書童よ命じ掬をゝて一冊を取しむ。書童誦して云。如意君安
樂否。少補曰を執て書ゝ。稿ゝ喚ゝ矣字数合ゝや。回況云。忍ゝ
ハ。野史よ則天后薛教曹沈ゝ。如意君と称を折ゝゝ人を惑し
てゝ安を図しむの辞ゝ。然ゝ字意属ハず。そひゝるとゝ。
少補云。ゝ漢末拾遺ゝ。霊帝の時ゝ武園山よ浮き大穴ゝ。大
小二ツの野手ゝよ樓むゝゝ。変じて美ぬんとゝ。男子を誘ひ来
て偶をなすゝ。ゝ意のゝくゝ。れバゝてゝ飲よ。試ゝ刻墨と
男子ゝたゞ。穴よゝて同居す。妖なゝて如意君と称ず。二妖互よ

出て食を求るゆえ。一妖ハ看守して近寄を拒ぐ。後ゆ常として其平生を殺ハしられハ。刘璽ハ恐き怪抱く。一日大妖出て食を求めゆるゆ及んで。汨れ死ぬ。妖怪者安楽あるや否やと問ふ。小妖内より答へ竊て已ゆ之を喫つと云。之をふゆる為妖象ひ追死つく湯山を噪す。撫人志のび独て之を詳さるゆを語るとなり。世の拾遺記ゆハ此文逸さう。之董卓曹操を為妖なたとへ。刘璽ハ即ち漢の帝位あり。野干ハ狐ゆ似て長木ゆ狐の獣と呼べく。人を食ふハ此種多るべし。此言ハ乃名を敖曹と為して則天七年号を改し獄談は高敖曹が嘱ゆ。孤長棒槌児の向あるより。大法の人乃名を敖曹とせし野豪なり。回臥徒て之蓋の事ハ忘れがたし。先生大記臆あるゆと称して無ゆ入り。茶果を吃して坐うちる。幾日つぐるて。小補遊猟の坐るゆて獲ゆ小禽を泥者ゆ提させ。回臥の庵ゆ入て息さんと。眠花の

うゆ来り。面を踏る時。和尚ゆ起ゆて之を捻の靴を脱し。脚ゆかゆて突出す。鞋ゆて問て。之今揉の活人途り。活人業ハ雨も柔て的ゆ。ゆ。ゆハ作ゆれ音も呼ず。百動一止ゆ。ゆず。と伎ち安在を回臥も途に投て。山途ゆ死活の轍ハ。ゆ。ゆハ久作て脚立てんせねバ人が敷侮ぞよ。猟の還ゆ。いたに偽家人と不言ぞうは て。此の文法が就出るゆのなり。莫妄想の天宝べし。之尺糸を入セぬ法ゆ。悟ゆ。ゆなり新しゆもある。地球ハ大極の塊ゆぞかし。伊ぞ言ちん掌上の珠化して眼中の沙と化んと。之宝めゆさ而。之下と亦ハ始ゆ苦我ゆ。ゆ。故ゆゆる業を吃して厭ず活ゆ。亦ゆ苦友ゆ。ゆ。ゆハ之トも久ゆ。ゆ化を離ゆ。ゆ機あゆと云。回臥素性粗暴ゆ。ゆて。ゆ才ある人を見ゆバ。ゆて賢人といゆ。少補憂さゆて。聖れ字法く偽ゆて聖言といひて賢言と

いそぎ。空しくいて賢愚といふ。されども人は用る時八宝し。究竟
八古今前は一人なく後は一人なく。仮りて人主の称は用るも時の数
あり。其因縁の一言は句。儒道は難一説べきれわ〜況と示す。言
下は供して。聖八慕而は世ずと。即日自己去聖と別号し再び失
訣ぜざる。居所をとるとまぐ〜。世の静なるぬは高くぬ。第形多く
永亨の比。夕晡持春侍とあり系猶して。島下の味舌れ西なる偏園
乃端は。遥構すとなんかう侍は山不ふてを秀逸は朝は廉を吸て
亭あうすおのが洞れまぐまてやぬまて朝ぶつさをークれてる

古今奇詩秀句冊第二巻終